

校長室だより **春日** (しゅんじつ)  
校長 清武 直人

### 複眼的思考

15日の朝、校門の方を見ると登校してきた子どもたちが集まっています。何だろうと思って子どもたちのところに近づくと、ニャーニャーと猫の鳴き声が聞こえてきました。女の子が子猫を抱いているのです。

女の子の話によると、親からはぐれた子猫が学校までついてきたとのことでした。

このままでは子猫が不憫だし、子どもたちも気がかりだろうと思い、職員室でとりあえず預かっておくことにしました。



いつもの、校門での子どもたちとの挨拶を終えて職員室に戻ると、山下先生が段ボール箱で子猫のお家を作り、牛乳を温めていました。子どもたちも、先生たちも、段ボールのお家をのぞき込んで、この子猫の行く末を案じました。

英語を教えてくれているアマンダ先生も猫が大好きで、猫の離乳食を買ってきてくれました。

なんと愛に満ちた学校なんでしょう！

でも、アマンダ先生が子猫の顔を見ながら言いました。

「子猫のお母さんは、子どもがいなくなった！って、泣いているかもしれないね。」

アマンダ先生の言葉にドキッとしながら、金子みすゞさんの詩を思い出しました。

### 大 漁

金子みすゞ

朝焼小焼だ  
大漁だ  
大羽鱈(いわし)の  
大漁だ。

浜は祭りの  
ようだけど  
海のなかでは  
何萬(まん)の  
鱈のとむらい  
するだろう。



じ こ しゅ ぎ      こう   ざ い  
「**自子主義**」の功と罪

ずっと前に、「自己主義」という言葉を「自子主義」という文字に置き換えて話をされた講演を思い出しました。

「自子主義」というのは、我が子を中心にしてしかものごとを考慮することのできない親の在り方というような定義だったと思います。

「自子主義」が増えれば、親同士の摩擦が絶えません。「自子主義」がまかり通っているとすれば、それは、周りの親が理性を持って堪え忍んでいるに過ぎないと思うのです。

「自子主義」も親が我が子を愛するがゆえのことだと思います。しかし、それが過ぎると、子どもの成長を曲げてしまうことにもなりかねません。

これが、「自子主義」の「罪」です。



ところが、「自子主義」にも「功」があるのです。それは、我が子の成長をよその子と比べない「自子主義」です。

子どもには、その子に必要な成長の時間があります。我が子に必要な成長の時間だけを見つめて、決して人と比べることのない「自子主義」です。

これは、かなり質の高い「自子主義」です。親の忍耐が必要です。しかし、将来必ずよい結果がついてきます。

春日小学校にもこちらの「自子主義」を実践している素晴らしいお母さんたちを時々目にすることがあります。

頭が下がります！

